令和2年3月1日発行／毎月1回1日発行／通巻971号／平成11年10月4日　第3種郵便物認可

総合演劇雑誌

テアトロ

3
2020

●2019年・劇評家20氏による
舞台ベストワン・ワーストワン

エッセイ　バリアフリー演劇／柴崎美納
「現代演劇・ルネサンス」のために／渡辺　淳

◉連載　共創する空間へ㉝　西堂行人

追悼　大野慶人さん！　上田美佐子

今月選んだベストスリー　308　渡辺　保

第32回テアトロ新人戯曲賞
第二次及び最終審査候補作品発表！

◆戯曲◆

ワーニャ伯父さん
―田園生活の情景　四幕
A・チェーホフ作／上演台本＝杉山剛志

語られざるもの
作・テネシー・ウィリアムズ
上演台本・江原吉博

罠
作・テネシー・ウィリアムズ
上演台本・江原吉博

No. 971

2019 舞台 ベストワン ワーストワン

南河内万歳一座「唇に聴いてみる」
兵庫県立ピッコロ劇団「マンガの虫は空こえて」

九鬼葉子

ベストを1本に絞るのは毎年難しいが、2019年は特に難しい。絞っても5本はある。どれが一番かは、観点によるのだろう。

南河内万歳一座の『**唇に聴いてみる**』（内藤裕敬作・演出）は、1984年初演。改訂を加え、1988年の岸田國士戯曲賞最終候補になった。当時は関西に扇町ミュージアムスクエアを始め、小劇場が次々に開設され、小劇場ブームの真只中にあった時代。活況を象徴する舞台だった。23年ぶりの再演。初演からすべて見ている私にとって、かなり驚きのある舞台となった。巨大団地に一人住まいする青年の、追想と妄想が交錯する。当時の時代背景で書かれた作品であり、主演の味楽智三郎と、少女役の岡田朝子が鮮烈で、はまり役だった。そのイメージは脳裏に刻まれているが、都市生活者の孤独が初演以上に際立つ舞台となり、主演の鈴村貴彦と坂口美紅は、全く新たな造形で期待以上だった。

主人公は、近所の空き家の不審火の第一発見者。逃げ去る誰かを見たのではないかと、刑事に疑われる場面から始まる。「見てません！」と必死の形相で絶叫後、鈴村の表情が急激に無表情に変容、喪失感が伝わる。男は、子供の頃は奔放な想像力で、見えないものでも見えたことを思い出す。新しい自分に生まれ変わりたい男は、想像力を奮い立たせる。

鮮やかな空想の世界が立ち上がる。団地のスーパーに客を取られた商店主達が、集客に向け、躍起になるエピソードを、西部劇仕立てで滑稽に展開。小学校の運動会を追想する場面では、客席を巻き込んでの玉入れで大盛り上がり。リレーは、スローモーションを効果的に用い、力強さを演出。

想像の世界が楽しければ楽しいほど、現実に戻った場面が切ない。「今は何も見えません」と呟く。格差社会から取り残され、未来が見えない人々の象徴に見えた。闇が深いだけに、変容しようとする時の爆発力を感じさせる演技。空き缶をコタツの上に置き、もう一度見てみようと空き缶を見詰める時、身体からエネルギーが溢れ出る。その直後、押し入れや天井から、夥しい数の空き缶がなだれ込み、現実に押しつぶされることになるのだが。さらに近隣住民から孤立、団地の治安を乱す者と邪推される。「……そうですか」と呟く時の諦念。最後に男は隣室の扉を激しく叩く。人とつながり、見えない未来を見ようとする渇望が痛切に伝わった。

坂口美紅は、男の追想に現れる少女の役。親がなく、転校を繰り返す、居場所のない子供。気の強い少女像を造形。だが、諦めた顔をしている。気を強く持たなければ、自分を保てない子供。我儘一杯に、自然に振舞うことのできない子供が、日本に、そして世界中にどれだけたくさんいるのだろう。この少女は、幸せになれるのだろうか。現代社会の様々な課題が集約された舞台だった。

兵庫県立ピッコロ劇団の『**マンガの虫は空こえて**』（島守辰明作、岩崎正裕演出）は、「上半期のベストプレイ」で述べたので、詳細を省くが、手塚治虫の自伝的な漫画3作を原作に、戦争で失われる若者の青春や夢、命を描いた。手塚の育った兵庫県宝塚市の豊かな自然を造形した装置が、2幕では反転、無機質な軍需工場になる舞台美術（加藤登美子）。岩崎正裕のダイナミックな演出で、命の尊厳を未来への希望と警鐘を込めて訴え掛けた。

清流劇場の『**壁の向こうのダントン**』は、フランス革命を描いたドイツの劇作家・ビューヒナーの原作に、ベルリンの壁崩壊から30年という今日性を加え、田中孝弥が脚色・演出。格差や民族の壁、人の心の壁を象徴的に描いた。大阪ガス株式会社主催「**イストワールhistoire**」シリーズの『**港でカモメがやすんでる日はね、千帆ちゃん**』（蟷螂襲作・演出）は、神戸港内をクルージングしながらの演劇体験。阪神・淡路大震災から25年経とうとする今も、痛みを抱える人々への労りと鎮魂が込められた。目覚ましく復興を果たした神戸港を眺めながら、どれだけの悲しみと苦難を経て、この町が生き返ったのだろうかと、改めて思いを馳せる時間となった。

ももちの世界のピンク地底人3号の新作『**カンザキ**』を始め、新しい世代から今後への期待が膨らむ秀作が続いている。

長年小劇場として根付いていた浄土宗應典院本堂が閉鎖されたのが残念なニュース。大阪市には、公立劇場がなく、篤志家による個人経営の小劇場が演劇界を支えている現状が課題。そんな中、ウイングフィールドのオーナー、福本年雄氏の第25回ニッセイ・バックステージ賞受賞は吉報。長年の氏への感謝を込め、関西演劇界全体が祝福している。インディペンデントシアター1stの新築移転再始動、京都の新劇場・THEATRE E9 KYOTOの開館、そして株式会社MBSメディアホールディングスから2024年にJR大阪駅前に新劇場開館が発表されるなど、嬉しいニュースも続いている。